なものである。是れ、私が、敢て
靖國神社は、日本魂の一大淵潢なり
と稱する所以で。是れ、國家國民に取りて、眞に光榮ある神社である。（「日本魂」）

アームストロング氏著「日本儒教の研究」を評す

姉崎正治

更に言はねばならぬ事は、之が爲に著者は、その研究の目的と正反對に走つたといふ事であります。著者は此の書の始めに、此の著者の目的は、西歐人に日本人を了解せしめむが爲なりと言つてをります。これは頗る結構ですが、著者は次の樣な結論に達してをります。『儒教の道德的理想は、文字上表面上は如何にも立派な道德書であるが、その精神に於ては缺くる處がある。…卽儒教は、少しも生命を鼓吹する事なく、又生命を與へる事もしない。儒教に限らず、斯かる種類の道德は皆そうである。』と言つてをります。かくの如く、著者は儒教の哲學的見解や倫理學說のみを見て、儒教の工夫存養を說いた精神修養及心的活動の方面を見て居りません。それ故に、かゝる結論を與へたのは、著者の偏見の然らしめた所で、儒教の缺點ではありません。

又著者は、次の問題を考へたかどうかといふ疑が生じます。卽『彼等儒者は、單に文字を敎へる爲の師匠であつたか、それとも、其の時代の道德生活の上に、實際上の影響を與へたかどうか』といふ問題であります。これは何人にも浮んで來る疑であります。著者は、彼等儒者の生涯や學說に就て多くの說明をなし、最後には更に此等儒學の諸派に關して、一般的說明をなさむ爲に、三章を

附加してをりますが、之を讀んでも、儒者が當時の人民や武士階級を實際如何に訓練したかといふ事は、殆ど說いて居りません。勿論著者は、『貝原益軒は平易な文體で書を著した』とか、『中江藤樹はよく村民を感化した』などは、說明して居ります。然しながら、著者は主して其の學說や、彼等の言に拘泥した爲に、其の敎育法や德育に關しては、何等說明して居りません。其の結果、著者は儒敎は文字上の敎であると言つたのであります。此の著書は『東洋からの光』と名けられて居りますが、光そのものを說かずして、單に其の光の反映のみを見たに過ぎないので、到底光其のものが與へた溫かみと生命とを見る事は出來なかつたのであります。

次に論ずべき多くの點はありますが、其等は省略して、著者が日本語を英語にするに、如何なる語を以てしたかといふ事を、一言し度いと思ひます。著者は、一般に同じ語を譯するのに、種々な文字を使つて居ります。例へば、朱子學派で特別の意味に用ひた『心』といふ語を譯するのに、"mind" "heart" "soul" 等を以てして居ります。又『敬』を譯するに "reverence" "respect" "piety" "modesty" を以てし、『生理』を譯するに、"living reason" "the principle" of production" "the principle of life" "living principle" "the principles (of heaven and earth)" "the actual law" の語を以てして居ります。斯くの如く色々な語を用ふる事も、修辭として必要でありませうが、一定の語を種々な語で飜譯する事は、寧ろ讀者を迷はすものであります。

又著者は、井上博士の書をあまり縮小したり變更した爲に、意味の通じない部分があります。例へば、著者は第五十頁に於て、蕃山と惺窩との相違に就て述べて居ります。蕃山は御承知の如く、王陽明と同じ樣な考の人であります。『王陽明の主旨は、人間の根本性を實現するには、直覺的知識卽精神的內觀による事を說き、かくして始めて『聖域』を實現し得るものであると考へた。然るに、惺窩は、朱子の說も名こそ異なれ意味は同じて、朱子はその理想境に達するに『窮理』を以てすと說いたに過ぎない』と言ふ樣な意味を述べむとして、あま

り文章を縮小した爲に、意味の通じないものとなつて居ります。(著者の文章略)又第五十一頁にも、之と同じ種類の解り難い文章を書いて居ります。

又著者は儒者の道德觀を論じ、佛敎との差異を論じて居ります。例へば第二百三十一頁から二百三十四頁に、仁齋の『道』と『道義』とに關する說を擧げて居ります。この處で、著者は『性』といふ字を用ひて居ります。もと井上博士がこゝに用ひられた『性』といふ字は、仁齋の所謂『性』でなく、(仁齋は此の字を哲學的原理の意味に用ひました)普通の意味の『性』であります。然るに著者はこの『性』といふ字を仁齋の說であると誤解して、仁齋の所謂『性』の意味に用ひたなども、大なる誤であります。此等の點は、假令大目に見逃しても、要するに著者が、儒者の道德觀と佛敎との相違に就ての結論は、間違つてゐるのであります。實際兩者の相違といふも、一方は人間の道德性を哲學的に說明し、他は道義を倫理的心理的に見たいといふ違ひに外ならないのであります。

次に著者は『東洋的汎神論』といふ文字を用ひて居ります。その說明をざつと揭げて見ますと、『王陽明は惡をその原理の中に取り入れなかつた爲、純粹の汎神論でなく、實際二元論となつてゐる。王陽明の學說のみならず、東洋の所謂汎神論は、大抵二元論である。これは、猶太人や希臘人の神觀に就ても同じ事で、神と宇宙とを對立させて居る點は、一元論でなく實際は二元論である、それ故に東洋の汎神論と西洋の神觀とは、互に相補つて完全なものとなるのである。眞の汎神論は、東洋の哲學の如く個人を一の幻影の如く考へてはならぬ。眞の汎神論は、眞の唯一敎であつて、必ず人格と個人の責任とを無視してはならぬ』と言つて居ります。此等の議論も頗る怪しいものです。

其の他色々非難すべき點もありますが、此等は省略しませう。唯一つ言つて置き度いのは、佛敎の『法身』に關する著者の說であります。著者は『時の經つにつれて、ウパニシャッドの影響を受け、殊に瑜珈哲學の影響を受けて、この法身といふ概念が、婆羅門敎の梵といふ概念と一致したのである』と言つて居りますが、如何いふ譯でかゝる憶

測を生じたか、是非著者に說明して貰ひ度いものです。

最後に此の書の出版を助けた校正係は、全く東洋に關する知識の無いものであつた、といふ事を言はねばなりません。多くの名稱の綴りが間違つたり、支那人の姓と名とがくつついたり離れたりして居ります。例へば、『書經』を "a classic on history" と記し、又 "shosho" と書き、『易經』を "a classic on philosophy" と書いて居ります。又古事記神代の卷を、"a book written in ancient times" と誤り、『五山』を恰も五山といふ一つの寺があつた樣に書いてをります、又時として驚くべき奇妙なるを書いてをります。例へば『日本が琉球を六世紀に征服した』とか、『藤原武智麻呂が西曆七百〇四年に大學の敎授になつた』とか、又『支那で用ゐる『天』といふ語は、もと神に關する敎から發達したものである』とか、又『佛敎が儒敎に及ぼした影響を見ひとしたならば、佛敎の "world of illusion" といふ語を『氣』に當て嵌め "Spiritual body of Buddha or law" を『理』に當て嵌めて見るとよく解る』と言ひ、又『九世紀の始め支那人を國外に驅逐した後、强烈な愛國心が起つた』などゝ書いて居ります。

最後に臨んで、兎に角著者が此の書を著はすに至つた勞力は、充分汲んでやらねばならねばなりません。然しながら、此の書を著はすに就て、其の配景法と全體の聯絡とを缺き、歷史的年代に就て不注意であつた事は、其缺點であります。又もつといゝ索引を附けて欲しいと思ひます。此書に關する大體の批評は、先づ以上の如くであります（六月）

◎ローゼンベルグ敎授の二名著

○佛敎研究名辭集（ペトログラード大學出版、定價十圓）

右は佛敎を研究せんとせる者の爲めに勞を吝まず敎授の集收せる正確なる佛敎術語の漢字々典なり。吾人は氏の學界に貢獻せる所の功勞を感謝す。

○漢字典（東京興文社出版、一圓五十錢）

本書は漢字典に敎授獨特の新機軸を出せるものにして、本書に由れば西洋語の辭書を引くと同樣の便利を以て漢字を檢索し得るものなり。我小學兒童と雖も容易に本書を利用し得可し。